072 青年像の建設

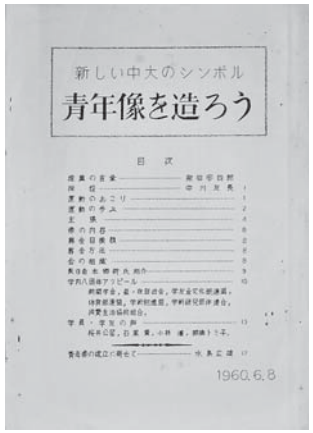
一九六一（昭和三十六）年十一月十八日正午、夜来の秋雨の中、「蒼穹（そうきゅう）」と命名された青年像の除幕式が挙行された。数十羽の鳩と色とりどりの風船が、駿河台校舎中庭の長方形の雨空に舞い立った。

「青年像」と呼びならわされているこのブロンズ像は、早稲田大学の大隈重信像や北海道大学のクラーク像のように、大学を象徴するものとなることを願って作られたものだった。しかし、両像が大学が提起し大学が作ったものであるのに対し、この像は学生から提起され学生によって担われた「運動」の結実したものだった。

五八年六月、中央大学新聞は、創刊五〇〇号を記念して学生歌の歌詞を募集、法学部二年岡本明久の「今こそ集いて」が選考の結果、第一席入選と決まり、賞金一万円が贈られた。彼は同紙五一四号に「学園にうるおいを」という一文を寄せ、「くすんだ校舎、少ない緑樹、舗装された中庭、それに数知れぬ落着かない表情の学生群が労務者のようにあふれている」殺風景な学園に、「雄々しく、力強い、わたしたちすべての肖像ともいえる、『中大の像』を建設しようではないか」と、学生歌の賞金を基金とした「中大の像」建立を呼びかけた。

この呼びかけは大きな反響を呼び、岡本のクラス二年法律科一四組、昼夜自治会、新聞学会で「像建設発起人会」が結成・開催され、翌五九年四月を目途に建設委員会を発足させることが決められた。委員会には、学生課・学友会三団体・協同組合も加わり順調に歩みだしたかのように見えたが、新入生歓迎大会での宣伝活動が終わり、夏休みも過ぎる頃になると運動は行き詰まりの様相を呈した。そこで、十月二十四日には建設委員会を解消、「青年像を造る会」として再出発することとなった。

「造る会」は、提案者の岡本を責任者として旧二法一四組有志を中心に、各団体が支援するかたちで具体的な運動を開始した。募金目標額一〇〇万円（像制作費六〇万円、付帯施設三〇万円、事務費一〇万円）。会計部・企画（広報・情宣）部・資金部・庶務部を組織、他の実行委員は一・二年生を対象に公募することとし、その体制で学内外の募金・物品等の寄付や廃品回収・映画・音楽会などに取り組む活動方針を決めた。同時に各部責任者と加盟八団体の連名で、「青年像建立についての申請書」を学生部へ提出した。この申請は十二月に認可され、正式な「青年像を造る会」が発足した。翌六〇年一月には、美術評論家の柳亮と代々木上原教会牧師赤岩栄の紹介で彫刻家の本郷新（ほんごうしん）と会い、すぐに制作依頼を内定、翌月には本郷が建立場所の検討のため来校している。


新しい中大のシンボル
青年像を造ろう
目　次
1960.6.8

造る会パンフレット（1960年6月）

一方、四月には目標額を二〇〇万円に変更、中庭に自動車部から提供されたドラム缶を据えて募金運動を開始、さまざまなかたちで募金が寄せられた。卒業生が亡友のために、あるいは拾得金が死後手に入ることになった学生の遺族・友人から、また本学を目指して受験勉強に励んでいた子息を亡くした母が、青年像へその遺志を託した。バイオリニストの辻久子も縁あって建設のために演奏会を催すなどのこともあった。決して順調とはいえないが、さまざまな思いを託された募金活動により、建設運動は徐々に広がっていった。

足かけ四年にわたる運動の末、六一年十一月、「造る会」は拒み続けてきた大学の援助を受け入れ、不足額八八万円の補助を得て、ようやく冒頭の除幕式となったのであった。

学内はマスプロ化が進み、総長選考や基本規定改定問題で揺れ、学外は安保問題に全国が揺れ、内外ともに矛盾が噴出し、時代の潮流が大きくうねる中でのことだった。

新しい大学を模索し、岐路に立つ中大に学ぶ学生自らのシンボルとして、青年像にはさまざまな思いが託された。その台座の銅板には、公募・決定された「若人は語り合ひ　そして　歩むのが好きだ」との言葉が刻まれている。

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第2版。一部修正を施している場合があります。